

新製品開発におけるフロント・エンド・ローディング
‘研究/製品開発の同時進行と開発体制’

— 2030年の技術 —

(株)ジヨンケルコンサルティング 落合 以臣

A Front End Loading in New Product Development

“New organization with simultaneous research and product development”

-Technology of 2030-

Shigemi Ochiai, Jonquil Consulting Inc.

Keywords: 製品寿命・QCD・体制・モラル・低下・情報・整理・習慣・発想の転換

近年の新製品開発は、顧客ニーズの極端な多様化といいますより、製品寿命が以前にも増して短くなったことで、研究開発を続けながら製品化を行う同時進行型でなければ、その需要に応えられなくなってきているといえます。それに並行して製品の品揃えも多くなり、開発の仕組みが良いか悪いに係らず、開発エンジニアにとってみれば、とにかくいち早く世に送り出さなければならないという状況に置かれています。いわば、知らず知らずの間に、長く培われてきた製品開発のプロセスを踏襲できなくなり、付け焼刃的な開発が台頭するようになったといっても過言ではないでしょう。また、短期的な製品開発のスケジュールの中でも、従来の品質保証は順守しなければならないために、開発エンジニアにとっても企業にとっても過酷な状況に遭遇しているといえます。

こうしたことに鑑みますと、新製品開発のフロント・エンド・ローディングという考え方は、すでに形骸化し現代の開発の仕組みに対応できないのではないかと疑問にかられます。しかしながら、新製品開発の過程を早い段階で可視化・定量化するという行為は、新製品開発にとって重要な位置づけで、それを怠れば上市した後にクレームとなって、必ず返品されることになるでしょう。では、どのような方法で従来のQCDを順守することができ、短期間で研究と製品開発を同時進行で進めることができるのでしょうか。それは、5年～10年先を絶えずニュートラルな視点でトレンド予測を行い、そのトレンド予測から消費者ニーズを製品構想へと落とし込む訓練を積むことであるといえます。もう一方では、あまり難しいことは考慮せず、一つの技術に集中し、それを製品の中心に据えた製品を新製品と称して上市することが考えられます。現在、上市されている製品は、ほぼこの考え方で開発されたものに近いといえます。しかしながら、後者の製品化方法では、従来の日本のお家芸であった“品質 is No.1”という称号から離れていき、いつの間にか開発エンジニアのモラルの低下を招いているといえます。したがって、従来のように製品構想をマーケティングに任せ、言われるままに製品化を行うのではなく、開発エンジニア自らが製品構想を描けるような仕組みを作ることが重要な要素になると思います。つまり、研究と製品開発を同時進行できる新たな開発体制といえます。筆者は、これを“5年～10年先の製品を見据えた新製品開発のフロント・エンド・ローディング”と考えています。

こうしたことは、何も難しいことではありません。常日頃から身近な情報を整理し、その情報が“何を意味し・何をもたらすのか”といったちよつとした見方ができる習慣を身に付けるだけのことです。情報は、溢れていますが、整理の仕方でダイヤモンドにもなります。この情報が、どのようにしてダイヤモンドになるのでしょうか。それは、まさに“発想の転換”であるといえます。

この JQ International Review が、愛読される方の背中をさらに押すことができれば幸いです。
